

英語と日本語における「風」のメタファー

Metaphors of Wind in English and Japanese

松 井 真 人

Mahito Matsui

要旨：本稿は、風に関する英語と日本語のメタファーを比較検討した。双方の言語には、風を起點領域とする概念メタファーが数多くあり、そこから生ずるメタファー表現も多くあるが、そのような概念メタファーを考察した結果、日英語には共通する概念メタファーと、それぞれの言語特有の概念メタファーが存在することが明らかになった。しかし、いずれの概念メタファーも、私達が持っている風についての日常的な知識すなわち風に関する概念に含まれる特定の要素と、目標領域の特定の要素の類似性とその経験的基盤となっており、他の概念メタファーと同様に、風のメタファーも恣意的なものではなく、その存在には動機づけがあることが明らかになった。

キーワード：風、メタファー、日本語、英語、経験的基盤

1. 序論

筆者は松井（2017）で、天気、晴れ、曇り（雲）、雨という気象現象に関する英語と日本語のメタファー表現の意味を分析し、日英語間の共通性と差異を明らかにした。また、それらのメタファー表現の派生元となっている概念メタファーの経験的基盤について検討した。その結果、メタファー表現の意味にも、概念メタファーにも、日英語間で多くの共通点があることが明らかになった。また、その共通点は双方の言語の話者の気象に関する経験の類似性、そのような経験から生ずる気象に関する概念の類似性、及び、人間の認知能力の観点から説明できることを示した。

本稿は松井（2017）の続編と言えるもので、風という気象現象に関する日英語のメタファー表現の意味を分析し、両言語間の共通点と差異、及び、風に関する概念メタファーを明らかにし、その経験的基盤について検討する。

2. 認知的メタファー論

本稿でメタファーを分析する際の理論的枠組みは、松井（2017）と同様に、Lakoff and Johnson（1980）に端を発し、認知言語学で発展した、認知的メタファー論である。メタファーの研究は古代ギリシャの時代から続いているが、長い間メタファーは、口頭弁論あるいは芸術的表現の技術であると見なされていた（佐藤1980）。しかし認知的メタファー論では、メタファーは弁論術や文学のような非日常的な言語活動だけでなく、私たちの日常的な言語表現の中に広く浸透しており、さらには、私たちの概念体系、すなわち思考自体がメタファーによって構成されていると考えられている。(1)の表現を見てみよう。

- (1) Our relationship has hit a *dead-end street*. Look *how far we've come*. It's been a *long bumpy road*. We can't *turn back* now. We're at a *crossroads*. We may have to *go to our separate ways*. The relationship isn't *going anywhere*. We're *spinning our wheels*. Our relationship is *off the track*. The marriage is *on the rocks*. We may have to *bail out* of this relationship.
Lakoff (1993)

(1) はすべて恋愛の様々な状況を表す表現であるが、斜字体の部分はすべて旅に関する表現になっている。さらに、これらの表現は決して詩的なものではなく、日常的な表現ばかりである。認知的メタファー論では、このような表現が存在するのは、英語文化において恋愛に関する概念が旅に関する概念に対応づけられて理解されているからだと説明される。このように、ある概念を構成している諸要素を他の概念を構成している諸要素に対応づけて理解する認知の仕組みは概念メタファー (conceptual metaphor) と呼ばれ、英語文化の場合は A IS B のように二種類の概念を IS で結びつけて表記されるのが一般的である。また、理解の対象となる概念は目標領域 (target domain)、目標領域を理解するために用いられる概念は起点領域 (source domain) と呼ばれる。(1) の表現が基づいている概念メタファーは LOVE IS A JOURNEY であり、そのうちの LOVE が目標領域、JOURNEY が起点領域となる¹。そして概念間の要素の対応づけは写像 (mapping) と呼ばれる。LOVE IS A JOURNEY という概念メタファーにおける写像は (2) のようなものである。

(2) THE LOVE-AS-JOURNEY MAPPING

The lovers correspond to travelers.

The love relationship corresponds to the vehicle.

The lovers' common goals correspond to their common destinations on the journey.

Difficulties in the relationship correspond to their common destinations on the journey.

Lakoff (1993)

以上のように英語話者は、LOVE のような抽象的で理解しにくい概念を、JOURNEY のような具体的で理解しやすい概念に対応させて理解している。そして物事の捉え方である概念メタファーを言葉で表現した (1) は、メタファー表現 (metaphorical expression) と呼ばれる。認知的メタファー論の大きな特徴は、メタファーを言語表現だけでなく概念体系に関わる現象と捉えることである。したがってこのメタファー論では、概念 (知識) レベルのメタファーである概念メタファーと、言語レベルのメタファーであるメタファー表現を明確に区別する (Lakoff 1993)。

概念メタファーで対応づけられる二つの概念はどのように選ばれるのであろうか。ある概念が他の概念に写像されるその理由あるいは動機づけは、経験的基盤 (experiential basis) と呼ばれる (Lakoff 1993)。どのようなものが経験的基盤になるかということについては様々な議論があるが、Lakoff and Johnson (1980) は、経験的類似性 (experiential similarity) と経験的共起性 (experiential cooccurrence) という二種類の基盤を挙げている。まず経験的類似性とは、客観的に存在する類似性ではなく、経験を通して主観的に認知される類似性のことである (谷口2003)。例えば、LOVE IS A JOURNEY の場合は、LOVE に含まれる「起点—経路—終点」

1 本稿では、言語表現と区別するために、英語文化の概念と概念メタファーは英語の小型大文字で表記し、日本文化の概念と概念メタファーは《》に入れて日本語で表記する。

という構造（イメージ・スキーマ）が、JOURNEYにも含まれると認識され、両者には類似性があると見なされる²。

しかし(3)の概念メタファーには類似性が関与しているとは言えない。なぜならば「嬉しい」と「上」、「悲しい」と「下」は似ているわけではないからである。

(3) HAPPY IS UP; SAD IS DOWN

I'm feeling up. That boosted my spirit. My spirits rose. I'm feeling down. I'm depressed. He's really low these days. Lakoff and Johnson (1980)

(3)の概念メタファーの場合は、人は悲しいときや、憂鬱なときにはうなだれた姿勢になり、楽しいときや元気があるときには真っ直ぐな姿勢になるというように、「嬉しい」と「上」、「悲しい」と「下」という二種類の経験が頻繁に同時に起こること、すなわち「経験的共起性」が経験的基盤となっている³。

3. 英語における「風」のメタファー

本章では、英語における風に関わるメタファー表現の意味と、そのようなメタファー表現を生み出している概念メタファーの経験的基盤を考察する。

はじめに、windの中心的な意味（共時的な中心義）を確認しておきたい。Longman Dictionary of Contemporary English (6th edition)（以下LDOCEと略記）は、最も使用頻度の高い意味として、(4)の意味を挙げている。

(4) moving air, especially when it moves strongly or quickly in a current

つまり、windの中心義は、「空気の流れ、特に強く速い空気の流れ」ということになる。『英語多義ネットワーク辞典』では、空気の流れの中でも特に気象に関わる「自然が生み出す比較的強い空気の流れ」を中心義としている。本稿もこのような気象に関わる意味をwindの中心義とみなす。

また、英語話者であれ、日本語話者であれ、大多数の人たちは、空気の流れとしての風(wind)に関して(5)のような知識を持っていると考えられる。

2 イメージ・スキーマとは、人間の身体的運動、物体の操作、知覚的相互作用の中に繰り返し現れるパターンのことであり、このパターンによって私達の経験が秩序立った識別可能なものとなる。起点-経路-終点の他には、容器、周期、部分-全体、反復、遠-近などのイメージ・スキーマがある（Johnson1987）。

3 Grady (1997) のように、「経験的類似性」という基盤を認めず、LOVE IS A JOURNEYのような構造のメタファーは、「共起性」を含んだ原初的な経験から得られる複数のプライマリー・メタファーが合成されて成立した複合メタファーであるとする考え方もある。しかし谷口（2003）は、「共起性」のみを認める立場には次のような問題点があるという。一つ目は、認知意味論はことばの意味に関して「ゲシュタルト」すなわち「全体は個々の総和以上である」という見方をとってきたが、プライマリー・メタファーを認めると、言語の「構成性」を認めることになってしまうという点である。二つ目は、類似性に基づく対応づけが、子供の発達初期段階から見られることを心理学的な実験が示しているという点である。三つ目は、Gradyは類似性には直接的な経験基盤がないと主張しているが、Lakoffらが主張する経験基盤主義は、「同時に経験する」という意味での経験基盤主義ではなく、類似性が経験の中から主観的に得られるという意味での経験基盤主義であるという点である。以上の谷口の主張は妥当であると考えられるので、本稿でも、概念メタファーの経験的基盤としては「経験的類似性」と「経験的共起性」の両方を認める立場を取ることにする。

- (5) 風は「空気」の速い「移動」であり、その方向や強さは常に「変化」する。それ自体は「目に見えない」が、草木をなびかせたり、人間の皮膚に寒さや抵抗感を感じさせたり、ものを移動させたりするなど、様々な形でその「存在」や「影響力」を表に現すことがある。特に強い風は、ものを壊したり、人を歩きにくくしたり、交通機関を止めたりするなど、人間の生活に「悪い影響」を及ぼすことがあるので、多くの人たちは強い風に対して「否定的なイメージ」を持っている。

Deignan (1995) は「風」に関わる見出し語として、windの他にbreeze、breezy、hurricane、whirlwind、storm、tempest、tempestuousを挙げている。またこれ以外に、LDOCEや小島他(2007)にはwindの関連語・類義語として、draught (draft)、gale、gust、blast、typhoon、tornado、twister、cycloneが挙げられている。これらの語の意味には、「空気の流れ」という意味に加えて、さわやかさ、風の強さ、雨、回転などの意味が加えられている。本稿では、これらの付加的な意味を含まず、最も一般的な意味を持つ語であるwindのみを取り上げることとする。

以下においては、Deignan (1995) によるwindのメタファーの意味の説明とその例文を挙げる。さらに、『ジーニアス英和大辞典』、『英語多義ネットワーク辞典』、LDOCEを基にして、Deignanが挙げていないメタファーの意味と例文を加える。

まず、Deignanは、windのメタファーの意味を(6)のように説明している。

- (6) windは地表面を動き、木などの物体を動かす力がある空気の流れである。the winds of changeやthe winds of discontentのような表現では、このような、止めたり制御したりすることができない力、物体を動かす力という概念が、物事を引き起こしたり変化させたりする可能性があるような状況について述べるために(特にだれもこのような状況を妨げることができないような場合に)隠喩的に用いられている。これらの表現は、あらたまった英語や文学的な英語で用いられる。Deignan (1995:152) (日本語訳は筆者による)

Deignan (1995) は、(6)の意味を持つwindを含む用例として(7)を挙げている。

- (7) a. Muslims have not been slow to sense the winds of change blowing through the world.
b. ...with the winds of democracy blowing over Africa.
c. ...the chill winds of the recession.

『ジーニアス英和大辞典』は、(6)に相当する意味として(8)を挙げている。

- (8) a. 〈風のように〉一掃する力、破壊力。
b. 〈変化などの〉風向き、動向、傾向；影響〈力〉

次に『英語多義ネットワーク辞典』は、中心義から直接展開するメタファーの意味として(9)を挙げている。これは人工的な風を表している。その用例も一つ挙げておく。

- (9) 風に似た空気の流れ：ものが勢いよく通過するときに引き起こす風、ファン・ふうごなどの風

The wind of the passing cars [a cannon bullet]

『ジーニアス英和大辞典』は、メタファーと考えられる意味として (8) 以外に (10) を挙げている⁴。その用例も一つずつ挙げておく。

- (10) a. 息 〈breath〉, 呼吸 〈する力〉; 肺活量.
get back [recover] *one's wind*. 「息をつく、一息つく」
b. 《略式》暗示、気配; 予感; うわさ、風のたより.
We got *wind* that the boss would be arrested. 「社長が逮捕されるといううわさを耳にした」
c. 《略式》[けなして] 空虚 [無意味] な話, たわ言; うぬぼれ
His talk is mere *wind*. 「彼の話はまるでたわごとだ」

さて、以上のwindの意味を、意味の類似性に基づいてさらに分類する。まず (6) あるいは (8) は、社会におけるある種の強い「力」や「傾向」を表していると言える。また、(9) と (10a) は「人工的に引き起こされた空気の流れ」を表している。(10b) はある事柄についての「示唆」を意味している。さらに (10c) は、話の内容や性格に「中身がない」こと、すなわち「無」であることを表している。

以上をまとめると、「風」に関わる英語の概念メタファーは (11) であると考えられる。

- (11) a. ARTIFICIALLY MOVED AIR IS WIND (人工的に引き起こされた空気の流れは風)
b. A FORCE IS WIND (力は風)
c. A TENDENCY IS WIND (傾向は風)
d. A SUGGESTION IS WIND (示唆は風)
e. NOTHING IS WIND (無は風)

次に (11) のような概念メタファーが存在する理由、すなわちメタファーの経験的基盤について検討する。まず (11a) について考えてみると、人工的な風と気象現象としての風は、当然のことながら、「空気の流れ」という特徴を共有している。したがって (11a) は類似性が経験的基盤となっている。

また、(5) で述べたように、私たちが持っているWINDの概念には「影響力」という知識が含まれる。したがって (11b) は、FORCEとWINDという二つの概念に含まれる「力」という要素の類似性が基盤となって形成された概念メタファーであると言える。

次に (11c) について考えてみると、物事の傾向には、特定の状況への移行・変化という要素が含まれる。また、そのような状況の変化によって、人に様々な影響を与える。一方、(5) で述べたように、私たちが持っているWINDの概念には「移動・変化」するもの、「影響」を与えるものという知識が含まれる。以上のことから、(11c) はTENDENCYとWINDの両方に含まれる「移行・変化」「影響」という要素の類似性が基盤となって形成された概念メタファーであると言える。

さらに (11d) の概念メタファーについてであるが、SUGGESTIONとは、直接的な言及や明確な姿や形はないが、ある物事存在を間接的に示す言葉、音、臭い、痕跡などのことである。

4 『ジーニアス英和大辞典』はwindに関して「動きの速いもの、変わりやすいもの」という意味も挙げているが、用例は挙げていない。また『ランダムハウス英和大辞典』(小学館)、『新英和大辞典第六版』(研究社)、『リーダズ英和大辞典第3版』(研究社)にもこれに相当する意味は記載されていない。さらに *Oxford English Dictionary* (2nd ed.) のwindの項目にもこの種の意味は見当たらない。以上のことから、本稿ではこの意味は取り上げないことにする。

このような、姿や形は見えないが、間接的にその存在を示すという特徴は、(5) のWINDにも含まれている。したがって (11d) は、WINDとSUGGESTIONという概念の間に認められる類似性が経験的基盤となって形成された概念メタファーである。

最後に (11e) についてであるが、風は音を立てたり木の枝を揺らしたりして、その影響を表に現すことがあるが、空気の流れである風そのものを見ることはできない。一方、当然のことであるが、何も無い状況においても、私達は何も見ることができない。このような、風と無の間に、何も見えないという類似性を認識することが経験的基盤となり、(11e) の概念メタファーが成立したと考えられる。

4. 日本語における「風」のメタファー

本章では、日本語における風(かぜ、ふう)に関わるメタファー表現の意味とそのようなメタファー表現を生み出している概念メタファーの経験的基盤を分析する。以下で挙げるメタファー表現は、主に中村(2014)と『広辞苑第七版』(以下『広辞苑』と略記)、『明鏡国語辞典第二版』(以下『明鏡国語辞典』と略記)から採ったものである。

まず、「風」は気象現象としての空気の流れだけでなく、英語の(9)と同様に、「人工的に引き起こされた空気の流れ」を表すことがある。(12)にその例を挙げる。

- (12) a. 扇風機の風
b. 爆風

(13) の用例の中の「風」には、「なりゆき。形勢、風向き」(『広辞苑』)という意味がある。

- (13) a. 脱原発の風。
b. 風向きが変わる。妙な風向き。
c. どういう風の吹きまわしか、めったに褒めないあの人が絶讃した。 中村(2014)

また、(14)の用例の中の「風」には、「慣習。ならわし。また、物事のしかた。やり方。」(『広辞苑』)、「人に対する世間のしきたりや流儀」「様子。様式。また、やり方。傾向。」(『明鏡国語辞典』)という意味がある。

- (14) a. 昔の風を守る
b. 世間を風刺した歌
c. 風紀を乱す
d. 昔の風儀がすたれる
e. 風習
f. 伝統を軽んじる風潮。最近の風潮。
g. 風調
h. 江戸時代の風俗。秋田の風俗。(以上『広辞苑』)
i. 浮き世の風は冷たい(『明鏡国語辞典』)

(15)の「風」は「おもむき。あじわい。いかにもそれらしい様子。また、それらしいふり」(『広辞苑』)、「おもむき。雰囲気」(『明鏡国語辞典』)、あるいは「《名詞について》いかにもそれらしい態度、様子、そぶりである意を表す」(『明鏡国語辞典』)という意味である。

- (15) a. 君子の風がある。
b. 何気ない風を装う。
c. フランス風
d. 麻のような風合の布地（以上『広辞苑』）
e. 先輩風を吹かす。臆病風に吹かれる。
f. 風格、風景、風味
g. 学風、気風、新風（以上『明鏡国語辞典』）
また、(16) では、「風」は「なりふり。すがた。」（『広辞苑』）を意味している。

- (16) a. 風貌
b. 風采が上がらない
c. 風骨
d. 端正な風姿
e. 勤め人らしい風体（『広辞苑』）

(17) では「風」は「うわさ」（『明鏡国語辞典』）の意味を持っている。

- (17) a. 風説に惑わされる。
b. とかくの風評がある。（『広辞苑』）

最後に (18) では、「風」は「それとなく言う」（『明鏡国語辞典』）ことを表している。

- (18) a. 世相を風刺した歌
b. 風喩（『広辞苑』）

次に以上のメタファー表現を、意味の類似性に基づいてさらに分類する。まず (12) の「風」は「人工的な空気の流れ」を表しており、これだけで一つのグループをなす。また (13) の「風」は特定の状況における「傾向」を表しており、これも一つのグループを成す。(14) は何かをする際の「慣習的なやり方」を表しており、これも一つの意味のグループを形成している。また、(15) と (16) は、ある事柄についての「示唆」を表していると言える。さらに、(17) と (18) は、いずれも言葉に関する意味であるが、どちらも直接的な言及ではなく、曖昧で間接的な言及を指している。したがってこれらも (15) や (16) と同じように、ある事柄を「示唆」するものを表している。以上の分類から、日本語の風に関する概念メタファーには (19) のようなものがあると言える。

- (19) a. 《人工的に引き起こされた空気の流れは風》
b. 《傾向は風》
c. 《慣習は風》
d. 《示唆は風》

次に、(19) の概念メタファーの経験的基盤を検討する。まず (19a) については、風は自然のものでも人工的に引き起こされたものでも「空気の流れ」という特徴を有している。したがって、(19a) の概念メタファーは類似性を経験的基盤としている。

また(19b)の場合、(11c)と同じように、《傾向》と《風》には一定の方向への「移行・変化」の特徴が含まれる。したがってこの特徴の類似性が(19b)の概念メタファーの経験的基盤と言える。

次に(19c)についてであるが、慣習は社会の中で決められた物事のやり方である。(19b)の傾向と同じように、このような社会的なやり方・取り決めは絶対的なものではなく、時代や場所によって一定の方向に変化する。また風自体も、空気が移動し、方向や強さが常に変化する。このように《慣習》も《風》も「変化・移行」という特徴を共有しているので、(19c)の概念メタファーは類似性が経験的基盤となって成立したと言える。

最後に(19d)については、英語の(11d)の概念メタファーの場合と同じように、《示唆》と《風》の両方に「姿や形は見えないが、その存在を間接的に示す」という特徴があることが、メタファー成立の経験的基盤になっていると考えられる。したがってこの概念メタファーの成立基盤も二つの概念の間の類似性である。

5. 結論

本章では、本稿の結論として、風のメタファーの日英語間の共通点と相違についてまとめる。まず、《風》が《人工的な空気の流れ》を表す(11a)と(19a)の概念メタファー、《風》が《傾向》を表す(11c)と(19b)の概念メタファー、《風》が何かについての《示唆》を表す(11d)と(19d)の概念メタファーは、日英語間で一致が見られる。これは3章と4章で見たように、これらの概念メタファーに関与する二つの概念間の類似性を日英語双方の話者が認識していることによる。日英語は言語の系統が異なるので、そのような二つの言語でメタファーが共通しているということは、このメタファーがさらに多くの言語にも存在している可能性が高いことを示している。

一方、英語の(11b)と(11e)、日本語の(19c)の概念メタファーはそれぞれの言語特有のものであると言える。しかしながら、これらのメタファーについても、風について英語話者と日本語話者の双方が持っている風についての概念、すなわち(5)のような知識に基づいて、その経験的基盤を説明することができる。つまりこれらの概念メタファーにも十分な認知的な動機づけがあるのであり、恣意的に存在しているのではない。以上の日英語の比較をまとめると、表1のようになる。

表1 風のメタファーの目標領域の日英語比較

	共通した目標領域		異なる目標領域
英語	ARTIFICIALLY MOVED AIR, TENDENCY	SUGGESTION	FORCE, NOTHING
日本語	《人工的な空気の流れ》《傾向》	《示唆》	《慣習》

以上のように、日英語の双方において、私たちが日常的に経験している気象現象である風に基づいて、様々な対象が概念化されている。風は空気の流れであり、その姿は見えないが、音を立てたり、木々を揺らせたりすることでその存在を示すという知識は、風概念の中でも中心的な知識であると考えられる。したがってこの知識を基盤とする概念メタファーが、日英両言語に存在するのは自然である。このような系統の異なる言語での共通性は、さらに多くの言語で同様のメタファーが存在する可能性が高いことを示唆している。この点については今後の研究課題である。

その一方で、両言語で相違する概念メタファーにも上で述べたような経験的基盤が存在する。Lakoff (1987: 346) が “Something in language or thought is motivated when it is neither arbitrary nor predictable.” と述べているが、風のメタファーも日英語において共通のものもあれば異なるものもあり、どのようなメタファーが存在するかは予測可能ではないが、本稿での分析によって、それらのどのメタファーも恣意的ではなく、経験的基盤という動機づけが存在していることが明らかになった。

参考文献

- 佐藤信夫 (1992). 『レトリック感覚』 東京：講談社。
- 谷口一美 (2003). 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』 東京：研究社。
- 中村 明 (2014). 『分類 たとえことば表現辞典』 東京：東京堂出版。
- 松井真人 (2017). 「日英語における気象に関するメタファー」『山形県立米沢女子短期大学紀要』 53: 13-27.
- Deignan, Alice (1995). *Collins Cobuild English guides 7: Metaphor*. London: HarperCollins Publishers.
- Grady, Joseph. (1997). Foundations of meaning: Primary metaphors and primary scenes. Unpublished doctoral dissertation, University of California, Berkeley.
- Johnson, Mark (1987). *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Lakoff, George (1987). *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Lakoff, George (1993). The contemporary theory of metaphor. In Andrew Ortony (Ed.), *Metaphor and thought* (2nd ed.) (pp.202-251). Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980). *Metaphors we live by*. Chicago and London: University of Chicago Press.

使用辞書

- 北原保雄 (編) (2010) 『明鏡国語辞典 第二版』 東京：大修館書店。
- 小西友七・南出康世 (編集主幹) (2001) 『ジーニアス英和大辞典』 東京：大修館書店。
- 新村出 (編) (2018) 『広辞苑 第七版』 東京：岩波書店。
- Longman Dictionary of Contemporary English* (6th ed.). Essex: Pearson Education Limited.

